

とを明らかにした。また、第1言語で獲得された文理解の方略の様式が、第2言語における方略に影響を与えることも示した。第4章は、ハとガの統語機能について、日本人の幼児から大人までを発達的に比較することによりいつ頃獲得されるのかを実験的に調べ、ガの格標示力（文法的な手がかりの強さ）が、ハよりも強いことが示され、両者の違いに基づいて弁別的に反応するのは日本語児にとっても難しい課題であることがわかった。第5章は、格関係の標示という統語機能の観点から、第4章と同型の実験を助詞ヲについて保育園年中児から成人までの8群に対して行い、ヲの格標示力がガ・ハよりも強いことを明らかにし、その理由について論じた。第6章は、ハとガの談話機能の発達について、保育園年中児から成人の8群に対して発話実験を行うことにより、新旧情報によるハとガの使い分けをみた。この機能は、中学校生頃になって完成することが示され、その獲得の困難さが指摘された。

第7章は、ハとガに対応する韓国語の主題助詞-eun/neunと主格助詞-i/gaについて、第4章の文理解の方略の実験と同型の実験を、韓国人の幼児から成人までの8群に対して行い、両言語に共通して主題助詞と主格助詞の獲得の時期が遅いことを明らかにした。現代日本語と現代韓国語は、文法的観点からみると類似性が高いことを示した。第8章は、韓国語母語話者に対し、第6章と同様の発話実験を行い、日韓両言語の主題助詞と主格助詞の類似性を心理学的方法で明らかにした。日・韓両言語において、談話機能に基づく主題助詞と主格動詞の使い分けの獲得の時期が極めて遅いということを示した。

第9章では、日本語の助詞の特徴を、成人と幼児・児童の諸言語の文理解の方略について、英語・韓国語・イタリア語・ドイツ語・オランダ語などと比較して論じた。第10章では、全体のまとめをおこない、文法問題に対する心理言語学的アプローチの有効性と限界、日本語助詞ハとガの獲得困難性を第1言語において明らかにしたことの意義、多重機能性という枠組みの有効性、助詞の文法的機能の相対性について考察を行った。

本論文のかなりの部分は田原俊司・朴 媛淑との共同研究によっている。本論文の各章は以下のように公刊されている。第2章：伊藤(1986)日本語の助詞ハとガの多重機能性。和光大学人文学部紀要, 21, 95-105。第3章：Kilborn, K., & Ito, T. (1989). Sentence processing strategies in adult bilinguals. In E. Bates, & B. MacWhinney (Eds.), *The cross-linguistic study of sentence processing*, 257-291. Cambridge University Press. 第4章：伊藤・田原(1986)ハとガの動作主性の発達。パン他(編)ことばの多様性, 87-106。文化評論出

版。第5章：伊藤・田原・朴(1991)被動作主をあらわす助詞ヲの獲得。教育心理学研究, 39(1) (印刷中)。第6章：田原・伊藤(1985)助詞ハとガの談話機能の発達。心理学研究, 56, 208-214。第7章：田原・朴・伊藤(1987)韓国語単文理解における主題助詞と主格助詞の動作主性とその発達。教育心理学研究, 35, 213-222。第9章：伊藤(1987)日本語の特徴：和光大学人文学部紀要別冊「エスキス'87」, 76-88。

東北大学

教育学博士

伊藤友彦 「幼児の発話における非流暢性に関する言語心理学的研究」

本論文は幼児期の発話における言い直しや繰り返しの非流暢性に着目し、その生起・消長過程を言語発達との関連で掘り下げて検討することによって、1)両者の間に存在する規則性を明らかにするとともに、その規則性を手がかりとして、2)発話に関わる言語処理機能の発達に関する仮説を提唱したものである。

本論文は7章からなる。1章では本論文の意義及び目的を従来の研究の問題点とともに述べる。2章は非流暢性の生起・消長過程と言語発達との関係をグローバルなレベルで検討したものである。自然発話を対象とした横断研究と縦断研究、さらに復唱法を用いた実験的研究を行った。2章の結果を受け、非流暢性の発生及び減少について3章では統語的側面の発達との関係を、4章ではメタ言語知識(「話すこと」, 「話し方」)についての自覚的知識との関係を検討した。5章は高頻度の非流暢性を一過性に示した幼児を対象とした縦断研究である。普通レベル以上の言語発達を示した1例に関する研究と吃音児を兄にもつ弟に関する研究からなる。

5章までの一連の研究の結果は以下のとおりである。

1) 格助詞使用前の1語発話期には自己修正は認められない。2) 格助詞使用前の2語発話期に認められる自己修正は1語発話における自己修正(SR1)のみである。3) 格助詞使用開始期にはSR1のみならず、2語発話における自己修正(SR2)、さらに3語発話における自己修正(SR3)も認められる。4) 多語発話(3語以上発話)及びPrenominal Modifier Construction (PMC)は格助詞使用後に出現する。5) 格助詞使用期(複文使用前)までに成人の自己修正カテゴリーの全てに対応する自己修正が出現する。6) 非流暢性のタイプと頻度は格助詞使用開始期から増加し、接続助詞使用期(複文使用期)に頻発する。7) 非流暢性頻度は2歳から増加、3～4歳で頻発し、5～6歳で減少する。8) 5～6歳では発話のプログラミング機能やメタ言語知識が発達する。9) 2～4歳では、非流暢性は使用する文の構造及び長さや密接に関係する

が、5～6歳ではそのような傾向がない。10) 2～4歳の中では、文の構造及び長さとの関係が最も強いのが2歳であり、3歳、4歳の順で両者の関係は弱くなる。

6章は総合的考察である。5章までの結果をふまえ、言語知識の習得に関して「日本語の習得過程において統語構造は格助詞使用前には存在しない」という仮説を提出した。言語知識に関する上記の仮説に基づき、発話に関わる言語処理機能の発達について「発話の発達過程において統語構造が存在しない段階（処理単位が単語の段階）から統語構造が存在する段階（処理単位が単語の段階）へと処理機構の変換が行われる。」という仮説（処理機構変換説）を提出した。そして、これらの仮説を中核とする発話における文処理機能発達モデルを提出した。このモデルは本論文における上記の結果を統一的に説明できるのみならず、これまで明示的な説明を与えられていない事実、1)発話構成語数が1語発話、2語発話、多語発話と変化すること、及び、2)格助詞が2語発話と同時に出現するのではないこと、3)格助詞の出現期と多語発話の出現期はほぼ同じ時期になることを同時に説明することができる。

一方、吃音を主訴とする幼児の中には非流暢性と言語発達との関連が普通児と同じ者が存在し、その場合、予後は良いことが明らかになった。この結果から、吃音の自然治癒という現象の少なくとも一部は言語発達との関連で説明できる可能性があることを指摘した。また、本研究で明らかになった、非流暢性と言語発達との関係に関する知見は幼児期における吃音評価の指標となりうることを述べた。

7章はまとめである。

筑波大学

教育学博士

加藤 厚 「青年期における同一性の特質と発達」

本研究の目的は、青年期における心理学的発達の観点から、Erikson, E.H.によって提唱された同一性概念に関する理論的整理を行うとともに、大学生、高校生、若い成人等を対象として同一性の発達に関する実証的検討を行うことであった。

1章のEriksonの心理社会的な人格発達理論の展望に続いて、2章ではEriksonによる同一性概念の定義の検討を行うとともにMarciaが提唱した同一性地位概念の検討と特徴の指摘を行い、Eriksonの同一性概念との関連を考察した。

3章では、測定、領域・側面、発達過程、社会的適応等の諸研究領域における主要な先行研究の展望と問題点の指摘を行った。4章ではBourne(1978)の理論的検討

を基礎とした混乱から統合に至る両極的同一性次元尺度、ならびにMarcia(1966)の同一性地位概念を精緻化し、達成、権威受容、積極的モラトリアム、拡散の4典型地位に加え、A-F（達成－権威受容）中間、D-M（拡散－積極的モラトリアム）中間の各地位を定義する同一性地位尺度の構成が試みられ、両尺度の基準連関妥当性を支持する結果が得られた。

5章では、高校生、大学生、大学卒業生を対象とした横断的検討が行われ、①同一性次元得点は、10代後半から20代前半にかけて男女ともにほぼ一貫して上昇する、②高校2年生では約6割を占めるD-M中間地位は大学4年生～卒業後1年目にかけて4割以下に減少し、A-F中間地位を含む同一性達成地位が全体の4～5割まで増加する、③本邦の大学生においては“将来の仕事”、“生き方や価値”、“勉強”等の領域が重要であり、“政治”“宗教”の重要性は平均的には高くはない、等の知見が得られた。

6章および7章では、大学1年生および3年生を2年間ずつ追跡調査することによって、同一性の発達に関する準縦断的検討が行われ、①同一性次元得点は2年次の後期にかけて男女とも緩やかに上昇し、3年次から4年次前期にかけてやや顕著な上昇を示した後、卒業間際に若干低下する、②男子では“生き方や価値”、“異性の友人”等に関する探索・危機(crisis)の水準の変動、女子では“勉強”、“将来の仕事”等に関する探索・危機の水準の変動と同一性次元得点の変化との間に有意な負の対応が認められる、③発達の安定性はD-M中間地位が最も高く、A-F中間地位を含む同一性達成地位がそれに続き、積極的モラトリアム、同一性拡散両地位の安定性は低い等の知見が得られた。また同一性地位間の移行に伴う諸領域における探索・危機ならびに自己投入(commitment)の水準の変化における特徴が検討された。

8章では、大学1年生のYG性格検査の結果、および大学4年生のゲス・フー・テストの結果から、大学生における同一性の様相と社会的適応ならびに諸性格特性との関連が検討され、①同一性次元高得点群は安定積極型、低得点群は抑鬱性、劣等感等の特徴を含む平凡型のプロフィールを呈する、②同一性次元得点とゲス・フー・テストとの間には「充実した積極的な生活」項目で有意な連関が認められる、等の知見が得られた。また9章では大学1年生を対象として同一性の様相と社会態度との関連が検討された。

10章では、高校生を対象として帰国生における同一性の特徴が検討され、①2年以上の一貫した海外在学経験は同一性次元得点を高める、②2年以上の海外在学経験を持つ群ではD-M中間地位の割合がより低く、積極的